

愛媛県におけるフラスコモの分布記録

小林 真 吾*

The distributional records of some *Nitella* species the freshwater algae, in Ehime Prefecture, Japan
Shingo Kobayashi

ABSTRACT

Some *Nitella* species the freshwater algae, were identified in Ehime prefecture in 2008. Their habitats were agricultural pond in usual, and they were observed by survey for repairs of ponds. In these species, the risk of extinction is increasing, so it is necessary for them to research and enlight for the conservation.

はじめに

車軸藻綱に属するフラスコモ属の藻類は、日本国内でおよそ50種にのぼるが、その大半が絶滅の危機に瀕している状態にある。そのような状況にあるにもかかわらず、地方の自然誌情報を把握するうえで基本単位とも言える都道府県レベルでさえも、確実な分布記録を把握している事例は少ない。愛媛県も例外ではなく、これまでにシャジクモ属 (genus *Chara*) も含めた報告はごくわずかである。愛媛県で藻類の分布記録を網羅的に示した八木繁一は、初期のフロラリストである「愛媛県海藻誌」の中で淡水藻類についても記述しており、新居郡氷見 (現在の西条市氷見) で「フラスモ」の記録がみられる (八木1930)。しかしながら、「フラスモ」は現在の種群の総称である「フラスコモ」にあたり、学名も *Nitella* sp. とし種を特定していないことから、これが現在の分類体系においてどの種にあてはまるかは、現時点では全く分からない。

筆者は以前、愛媛県内に分布する希少淡水藻類の現状について報告した (小林2005)。しかし、その時点ではこれら車軸藻類についての情報が乏しく、確実な記録としてシャジクモ (*Chara braunii*) のみを報告した。当時もフラスコモ数種の分布を確認していたが、確実な同定ができなかったことから、フラスコモについては現状不明とするも、調査の進展で記録が増加する可能性があることを述べた。以後数年間、積極的な調査に取り組めないうちで、近年、農耕地の環境整備において比較的詳細な事前調査が実施される事例が増加し、フラス

コモ類の採集が相次いだ。そこで本稿では、近年確認された県内のフラスコモ類の記録について総括する。

愛媛県内で確認されたフラスコモ属藻類

ヒメフラスコモ

Nitella flexilis Agardh var. *flexilis*

採集・確認地点：新居浜市外山町、西条市下島山、今治市波方町樋口、西予市宇和町

日本各地の池沼などに生育する大型のフラスコモで、分布は汎世界的である (広瀬・山岸1977)。今回報告する3種のうち、最も多くの地点で確認された。前報で記述できなかったフラスコモは、新居浜市外山町のものである。同地は湧水池で、水位や水質に大きな変化はないものの現在では生育が確認できない。フシナシドロ等の糸状藻類との競合が衰退要因として考えられる。西条市および西予市の生育地はいずれも農業用のため池で、改修工事の環境調査で確認された。今治市の生育地も農業用ため池で、後に記すニッポンフラスコモと同じ池である。本種は2000年の環境省レッドデータブックおよび2008年の環境省レッドリストのいずれでも、絶滅危惧I類にカテゴライズされている。

ヒナフラスコモ

Nitella gracillima T.F.Allen var. *gracillima*

採集・確認地点：西条市下島山

本州から九州に生育する日本固有のフラスコモで、ヒメフラスコモと比べると小型である (広瀬・山岸1977)。最終枝の分岐が目立たない個体では、外見がシャジクモに似る。西条市東部で、ヒメフラスコモが生育するため池の近隣の池で確認された。本種は2008年の環境省レ

*愛媛県総合科学博物館 学芸課 自然研究科
Dept. of Natural history Ehime Pref. Science Museum

ドリストで、新たに絶滅危惧Ⅰ類にカテゴライズされた。

ニッポンフラスコモ

Nitella megacarpa T.F.Allen var. *japonica* Imahori

採集・確認地点：今治市波方町樋口

本州から九州に生育する日本固有のフラスコモで、ヒメフラスコモと比べると小型である。今治市波方町のため池で確認された。生育地ではヒメフラスコモが池堤体側の深いところに生育する傾向が認められたのに対し、本種は岸辺に近い緩傾斜の泥底に生育する傾向がみられた。2008年の環境省レッドリストで、新たに絶滅危惧Ⅰ類にカテゴライズされた。

今回報告されたフラスコモ類は、いずれもため池など人為的に整備された水域で発生している事例が多く、うち数例は改修工事に伴う環境調査で確認されたことは特筆に値する。このような調査は近年の社会情勢や開発整備に関する法制に起因するものである。これまで省みられることのなかった希少種に対しても注意が払われている現状から、淡水藻類に関しては一定の効果が出ているものと考えられる。今後の調査の進展により分布記録は増加するものと考えられる。

おわりに

2000年に環境省が刊行したレッドデータブックでは、絶滅のおそれのある藻類は71種であり、そのうちフラスコモ類を含むシャジクモ科の藻類は30種と約43%にのぼった。その後、環境省は絶滅危惧種の見直しを行い、2007年に新たなレッドリストを公表した（環境省Hp）。このリストでは絶滅のおそれのある藻類は104種に増加、シャジクモ科の藻類も62種と約60%まで増加した。今回報告した3種のうち、ヒメフラスコモは前回のレッドデータブック刊行時点から絶滅リスクに変化はないが、残りの2種は前回の指定対象外から一気に絶滅危惧Ⅰ類に指定された。前回の調査には情報が少なかったことも考えられるが、現在ではその存在を無視できないほどに日本全国で絶滅リスクが高まっている。

約60種もの種で絶滅リスクが高いシャジクモ類の現状は、藻類に限らず他の生物群と比しても尋常とは言えない。にもかかわらず大きな問題として取り上げられることが少ないのは、身近な生物としての認識が薄いことや、種の同定に高倍率の顕微鏡が欠かせないこと、普及や研究を担う専門家が慢性的に不足していることが主な要因と考えられる。日本の農村的水辺環境における絶滅危惧種の保全活動では、大型の鳥類や花の咲く植物といったある種のコンパニオンの生物では保全策を訴えやすく、保全活動の効果も目に見えて分かりやすい。しかし生活

環の全てが水中で目立たず、しかも胞子で増殖するこれらの淡水藻類が保全対象として取り上げられる事例は、圧倒的に少ない。愛媛県では今後、開発事業に伴いこれらの淡水藻類が確認される事例が増加すると考えられることから、情報収集と同時に、種の認識を深める普及啓発と的確な保全策の提示が必要である。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、筑波大学第二学群生物学類の西山未理氏にはフラスコモ各種の同定をしていただくとともに、分布や生態に関する有益な知見をご教示いただいた。ここに記してお礼申し上げる。

文 献

- 広瀬弘幸・山岸高旺（1977）：「日本淡水藻図鑑」pp759-829。
内田老鶴圃。東京
- 環境省（2000）：「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—9 植物Ⅱ（維管束植物以外）」pp. 財団法人自然環境研究センター。東京。
- 小林真吾（2005）：愛媛県において絶滅のおそれのある淡水藻類
- 八木繁一（1930）：「愛媛県海藻誌」pp44. 松山堂書店。愛媛。
- 八木繁一（1964）：「伊予の海藻目録」愛媛県立博物館研究報告第4号。pp52.
- 環境省 <http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8648>